連合PTA

生徒指導緊急対策研究会で しつけのあり方を話し合う

村連合PTA（会長・杉本治一郎）は、七月三十一日横越中学校で生徒指導緊急対策研修会を開き、児童・生徒の校外指導及び家庭におけるしつけのあり方などを話し合いました。

研修会には、小・中学校の父母・先生ら一五〇人余りが参加、分科会で〝家庭や学校のしつけはどうあればよいか〟〝家庭における父母の役割はどうあればよいか〟〝好ましい親子関係、地域ぐるみの補導はどうあればよいか〟を話し合ったほか、県家庭教育推進委員の相馬英夫氏を招き「ゆれうごく十代」と題して講演を聞き、家庭、学校におけるしつけ、指導の考え方を新たにしていました。

そこで、各分科会の話題を拾ってみました。

れている食事の場

家庭のしつけ、学校の指導は、父母・先生とも気になるところ。分科会では〝あいさつ〟や、〝家の手伝い〟が話し合いの中心になっていました。

第一分科会（小学校1～3年部会）
何を手伝いさせたらいいのか 悩む父親

「学校では集団生活の上で必要なあいさつ後始末などができるようにしつけている」「あいさつをしない子したくない子が各学級に一割程度いる。」「担任の先生には、あいさつが言えるが、一般化の段階まで広がっていない。」と話す先生たち。一方、お父さん、お母さんたちは、「親の方から〝おはよう〟とことばをかけている」「子どもの方から言えるようになった」と話す。

家の手伝いは、低学年の場合、玄関そうじ、食事の準備あとかたづけ、動植物の世話などをさせている家庭が多い。

しかし、「テレビのマンガがある時はなかなかやらない」「子どもたちに責任のある仕事を分担させたが失敗した」「今、何をさせたらいいのか」など、家の手伝いに悩んでいるお父さんたちもいました。

助言者は「しつけの基本は食事にある。最近のいそがしい生活の中で、基本的欲求を満たす食事の場がうばわれてきている。今日の家庭は〝家族あって家庭なし〟〝家庭のない家族〟があり、家庭でしなければならないことが見失われている、考えていただきたい」と話す。注目されたのは、「先生をこわいと思わない最近の子どもたち、ある程度の体罰はあってもよいのではないか」と学校側にきびしさを求めるお父さん。それに同調するお母さんの発言があったことです。

第二分科会（小学校4～6年部会）
母親まかせのしつけが多い

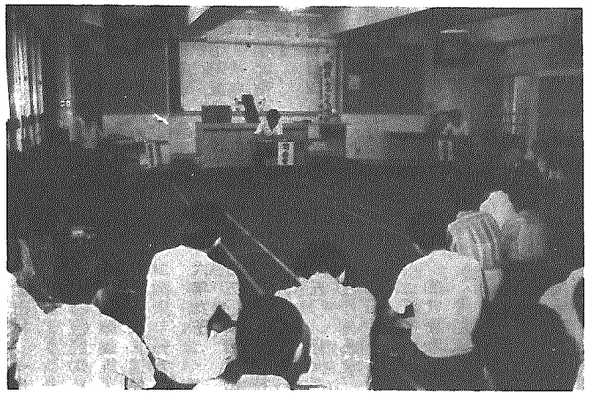
分科会に参加された大半のお父さんたちは忙しさのあまり、子どもと接する機会が少ないと反省。「親の愛情ときびしさをもったしつけが必要」「父親はけむたい存在でもいいのではないだろうか」と父親の威厳を強調しながらも、子どもの教育は母親まかせの家庭が多いようです。

一方、お母さんたちの中には、「一日中、家にいるので子どもの悪い所が目につき、すぐ口を出す。娘の方はよいが、息子はすねたりしてむずかしい」「子どもが登校拒否になりそうなことがあった。接する時間が少くても、子どもが悩んでいることを気づいてあげないといけない。これから大きくなってゆくと、どうしたらよいのかと思う」と子どものしつけに不安をもっている声も聞かれました。

また、お年寄りにまかせて勤めに出ているお母さんたちも多く、お年寄りとのしつけの相違を心配する声もありました。

しかし、参加されたお父さん、お母さんたちの話の節々に明るい家庭づくりに、一生懸命であることが伺われました。

「父母の役割の決め手というものはない、子どもが三人いれば三人とも育て方がちがう、今一番大切なのは、親は責任をはたしているだろうか。子どもに責任を負わしているだろうか、今の子育ては可愛がったためにダメにしているところがある。三歳から小学校入学までは人間の信頼関係を育てる。中学時代は自立に目をむけさせることが大事だ」と話す助言者。



三つの分科会で、校外指導、家庭のしつけのあり方を熱心に話し合う父母、先生たち。

しつけの基本失わ

第三分科会（中学校部会）
むずかしい中・高校生の校外活動

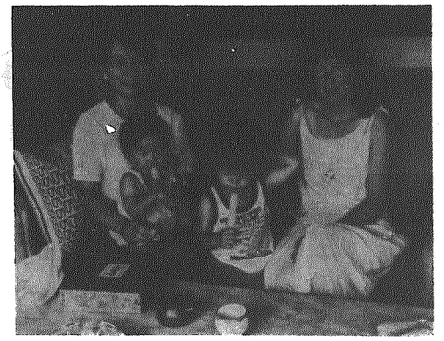
いま、中学生の非行が社会問題になっていますが、村ではそうした問題がないのか分科会では話題にのぼりませんでした。

「十二月末に年間の反省を聞く」「お父さんは、毎日よく話し、ちゃんと子供の話しをうけとめてくれる」など、中学生ともなると、父母との会話が少なくなっているなかで、子どもとの対話の事例が話されていました。ただ「しかり方を知らない」の悩みもあるようです。

地域ぐるみで青少年健全育成に取り組んでいる村民会議横越下支部の活動事例も紹介され、中・高校生を含めた校外活動のむずかしさ、悩みが話されました。

「座禅のつどいに中・高校生に参加を求めたが集まらなかった。今度は隣組対抗の野球大会に、中学生を必ず二、三人入れるよう計画しているどのような条件をそろえたらよいものか。」これに対して中学校の先生は、「地域での行事の参加は学校も呼びかけているが、学校の行事との関連でうまくいかない時もある。」「今の子どもは、全ての条件をそろえないと出たがらない。子どもたちは、計画を知らないのではないのか。」「地域と学校とタイアップして行事を計画するのもよい。」と話す。

助言者は、「中学生ともなるといろいろな所に出たがらない。青少年の健全育成は地域活動が大切、しかし子どもたちが地域で育つ部分が欠けている面が多い。お年寄りから子どもまでの縦系列の活動が必要、子どもがのってくるような条件を作ってやることが大切である。」「社会教育の進んでいるところは、非行が少ない」と話していました。



日本にもう一度きたい……と話すエバンスさん、左、佐藤和子さん

アイルランドの女教師

東洋の神秘に魅せられて

木津　佐藤さん宅に宿泊

アイルランド女性、アーリン・エバンスさん（27歳）が八月八日、サーバス友の会会員佐藤和子さん（木津・佐藤正明さん夫人）方に宿泊されました。

そこで本紙は彼女の見た日本を訪ねてみました。

エバンスさんは首都ダブリンの中・高等学校の仏語、独語の先生で、二ヵ月余りの夏休みを利用して日本各地を旅行しているもの。

――なぜ日本を選んだのですか。

経済大国ということで、日本の情報をよく耳にし、興味を持っていました。また、自分の国と非常に異った住居と生活様式があること。東洋の神秘的なものにひかれていました。

――実際日本に来てどうでしたか。

近代的になっていますが、まだ日本の良さが沢山残っていると思います。日本がとても好きになりました。

――北方博物館を見学されて、どんな印象を持ちましたか。

京都で三つのお寺を見ました。静かなところを求めてきたのですが、そこには沢山の人で驚いています。博物館はそこよりも静かで、きれいで大変素晴しいところです。

――日本の中・高等学校を見学されましたか。

九州のある高校を見ました国では最大限二十五クラスまでですが、私の見た学校は四十クラスもあり大変びっくりしています。それに私たちの国ではグループ学習ですが、日本は教え方が厳しいようです。

――日本の英語教育をどう思いますか。

日本人があまりにも英語を話さないので驚いています。文部省で海外から英語講師を受け入れていると聞いていますので、できたら日本で働いてみたいと思います。

昭和59年歌会始のお題及び詠進歌の詠進要領

一、歌会始のお題
「緑」

一、詠進歌の詠進要領
。自作の歌で一人一首とし未発表のものに限ります
。用紙は、半紙とし、毛筆で自書。（代筆の場合はその理由を書いた別の紙を添えてください）
。書式
（約24センチメートル）

緑
、、、